

# ひまわりからの

## メッセージ

28号

2013. 7. 9

西濃圏域  
発達障がい支援センター  
ひまわり

発行人：中野すみ子

### 七夕の祈り

保育園や小学校を訪問させていたと、この時期

は七夕がかりを目にします。子どもの字で短冊に書かれ

た願いごとは、どれもほほえましく、それを書いた子の

姿まで想像してしまいます。ある小学校の生徒さんは、

「ぼくの名前は読み方が難しいから神さまが読めないか

もしれない」と、名前にふりがなをふっていたそうです。

その話をして下さった先生の笑顔が、その子を中心うい

しさにあふれていて、私も心が豊かになった気がしました。

七夕の季節になると、私は一人のお母さんを思い出

ます。重い知的障がいをもつ女の子のお母さんでした。

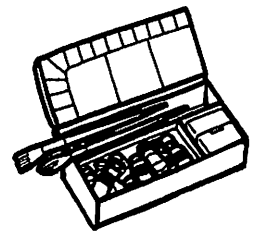
笹につけられた短冊には、「一度でもいいから、お母さんと呼んでほしい」と書かれていました。その方はいつも明るく、お子さんと一緒に遊び、ことばをかけ、お子さんのことば（声）に笑顔で応えていらつしゃって、本当にほほえましい親子として私の目には映っていたのです。

その短冊を読み、その方の切なる願いを知って胸をつかれました。そして、私はそれまで、その方の表面だけしか見ていなかったことに気づかされたのです。けれども、そのお母さんの祈りにも似た願いは、その後、決して叶うことはありませんでした。彼女が日本語として、有意味語を話すことはなかったのです。でも、私たちの耳には聞こえないけれども、彼女はその「声」の中に、「おかあさん」ということばを含めて母に呼びかけていたに違いないと私は思うのです。

人工衛星やロケットのとぶ時代になっても星に願いを托す……それは、見えないもの、時空を超えたものへの畏敬でもあるのでしょうか。七夕の夜、私も星を見上げて、亡くなった母をそっと呼んでみようかなと思えました。皆さんはどんな願いをこめられたのでしょうか。

# 子どもの心の中に

## 残っていくもの



最近、青年期の相談を何件か受けた。幼児期の相談は主にことばの遅れであったり、園の集団生活にうまくなじめない、友だちとトラブルがある(らしい)、とても多動であるといったことが多い。

小学校になると、学習面で皆についていけない、友だちとのトラブル、授業中の離席、教室から出ていってしまう、勝手なことをしたり、授業妨害になるような発言があるというようなことである。

中学校では、暴言、不登校、破壊行動などが多いように思う。

しかし、青年期になると、もっと深刻な問題がいっぱい起きてくるように思う。家族間の問題や異性問題、金銭のトラブル、昔のことが思い出されて暴れてしまうフラッシュバックとかタイムスリップ現象

と言われるような状態、本人の自己肯定感の低下による自殺願望……など、どれ一つとってもむづかしい問題はかりである。

相談を受けても頭をかかえ込んでしまうようなことが多すぎるが、それでも幼い頃からかわり、細い糸であつてもつながっている場合には、家族、特にお母さんとは、初対面の人とはちがうものがある。相談を受けたその時点から、一緒に考えていくことが当り前のように一歩を踏み出せると思えるのです。

今、私が一番心を痛めているのは、十年以上も前のできごとを引きずり、当時のことがフラッシュバックしてしまつたために苦しんでいる青年のことです。

私たちは、どんな時に子どもを叱るでしょうか？、友だちを叩いたとき、特に何もしていない友だちを叩いたとき、そうです、多分私もそうするでしょう。でも、学校での友だちとのトラブルの多くは、先生の見えていない時だったり、見えない場所だったりするのではないでしょうか。そうすると、先生の判断は当然、周りの子どもたちの訴え

によってなされることになります。でも、本当に子どもたちの声は正しいのでしょうか。本当に、その相手の子は何もしなかったのでしょうか。

私は、かつて、ある自閉症のお子さんが、登園早々に、まっすぐに、お友だちも目がけて走って行って叩いた場面に出くわしたことがあります。実は、ひまわり学園は週二回の登園なので、その子は、一週間前の仕返しをしたのだということが後でわかりました。

ある子は、嫌がるお友だちの服をひっぱって無理に椅子に座らせようとし、「お友だちがいやがっているでしよう？、クメー」と先生に叱られてしまいました。でも、先生はその前に「きちんと座って待っててね」とおっしゃったのです。ですから、その子は友だちに注意をしたのです。でも、うまく表現できない子だったので服をひっぱるという行動に出たのでした。

またある場面では、泣いている子がいます。見ていなかった先生は、「どうしたの？」とたずねられました。すると、「〇〇くんがやったんや」と一人が言うのと、皆も「〇〇くんやった」と口々に言います。言われた子は

いつも叱られてばかりの子です。「ほく、やってないもん」と抗議しましたが、日頃の行いから、結局は「ちゃんと正直に言わな、あかんよ」ということになりました。

例をあげればきりがありませんが、こういったことは実は日常的にあることだらうと思います。発達がゆっくり目の子や発達にアンバランスをもつ子にとっては自分の気持ちをも人にうまく伝えるということは、とても難しいことです。多分ご家庭でも、お母さんたちは「どうしてそんなことしたの？」「何かあったの？」などいいえ、言わなきゃ分かんないのでは？」などと、おっしゃっているのではないのでしょうか。

子どもたちは、自分が悪いことをしたと思った時、叱られて当然だと思おう時には、大人の注意や叱責を受け入れることができると思えます。けれども自分が悪くない時には、大人は理不尽だと思おうのではないのでしょうか。でも、ことはどうも言えない子は、「ほく、やってない」「ほく悪くない」という気持ちをもとの様に表現するのでしょうか？

前述の青年は、水槽をひっくり返してしまいました。皆さんがかけつけて、「大丈夫？」、「大丈夫？」と気がかかってくれました。でも、彼の心の中では、「大丈夫」イコール「悔しかった日のできごと」という記憶がすり込まれ、ニックをおいすようになつたのでした。

「お友だちに注意するのは先生の仕事です。皆さんは注意しません」というクラスの約束があつたらうよかつたのかなとも思っています。「注意してくれませんか？」。お友だちが聞いてくれない時は叩かずに先生に言うね」ということばがあつたらうよかつたのかなとも思っています。

そのできごとが、ずっとずっと尾をひいて、十年以上の時を経てまだまだ青年を苦しめている現実を前にすると、私たちの日々の言動を常に謙虚に見直していかねば……と思ひます。

このことは、何も学校や園でのことではないと思ひます。父と子、母と子の間柄において、もっともっと親しきゆえのことは刃がとびかっているのかも知れません。「この子には良い祈なんが一つも無いんで

す。」とおっしゃるお母さんもおられます。そうではうか。子どもたちは、すばらしいものをそれぞれにもつていて、ではないでしょうか。弱い所もあるけれど、そこを支え、援けていき、その子自身が自信をもてるように、輝くように育ててほしいと思ひます。

発達障がいといわれる子どもたちは、特に叱られることを積み上げて、いつてしまいます。そして辛かつたことばかりを記憶にとどめてしまつとしたら、それは誰の責任なのでしょう。

「ダメー」と言うよりは「くするといひよ」の方がいい。「何でそんなことしたの」「より」「くしたかったんだね」と、否定よりも肯定的にとらえながら、子どもたちの困り感を支援していきるといいなあと思ひます。もちろん、子どもたちの中には、自分が困っているのだ、ということさえ分かっていない子もいるのです。

大人の側のテンションを上げないで、少し大らかな気持ちで子どもたちに向き合えるといいですね。声のトーンを落として……。



子どもの知っている

語いの数は？



先日、ある研修会で「五歳の子の語い数は、三〇〇〇〜六〇〇〇です」という話が出ました。三千と六千では、三千の差があります。講師の大阪府立大学の里見恵子先生は、この語い数の差は、家庭環境の差であると言われるのです。

子どもたちのことは、どのように育つのでしょうか？、ことは決して訓練で獲得されるものではなく、赤ちゃんとのかうのお母さんや家族とのコミュニケーションが基本です。話し手と聞き手との相互のコミュニケーションの中でことは育ってくるのです。言ってみれば視線や動作などノンバーバルなコミュニケーション（ことは以外のコミュニケーション）を使いながら相互にかかわってきます。子どもが発信してくる笑顔や泣き声や音声、しぐさなどに合わせて子どもの気持ちや考えを讀みとってことばを返していくわけです。そして、さういふかわ

りの中で愛着が育つように育てていくわけです。ことは、よくキャッチボールにたとえられますがキャッチボールとちがって目に見えないことはのやりとりは、相手のレベルがわかりづらいために、レベル以上のことはかきつけてしまったり、逆に簡単すぎることは返してしまふこともあって、それ故に里見先生は家庭環境の差を指摘されたのでしよう。

「ことは」というと、発音であったり、語い数だったり、意味だったり、さういうことを考えがちですが実は、語用論といって、いわば言外の意味を知ることが会話にとって必要です。例えば私が電話で「お母さん、いらっやいますか？」とたずねたとします。Aさんは「はい、少々お待ち下さい」と言ってお母さんに代わってくれました。Bさんは「います」と言ったきり、いっこうに代わってくれる様子がありません。つまり、私のことはを聞き、言外の「いらっやたり、代わって下さい」ということを察してくれただのAさん。Bさんは字義通りに解釈したということになります。これが語用論です。そして

私たちが支援の対象にしている子どもたちは、この言外の意味を理解するのがとても苦手なのだと言えるでしょう。

世界の国旗は全て知っていると、恐竜について右に出る者はいないとか、知識として、とても多くのことを知っているのに、言外の意味や意図を知ることは難しい人たちなのです。

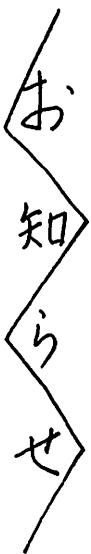
語用論は、「ことばの使用の理論」とも言われていて、話し手は聞き手に対して言語をどのように用いるか、そして聞き手はどのように理解するかという点に焦点をあてているのです。

私は今、五歳児の検査を頼まれて行っています。子どもたちの中には質問されていることの意図がわからなかったり、表現する力の弱いお子さんが多いことを感じていきます。

幼児期は遊びの中でコミュニケーションや社会性が育まれていきます。当然遊びの主体は子どもたちなのであって、大人の意図や指示、命令に従わせることではありません。けれども、子どもの発する

意図を大人である私たちがどのように受け止めて応えていくのかということは、とても大事なことです。

人に対しての意識のうすい子どもたちに対しては、子どもの動作に応じて大人がまねをしてみたり、子どもの発する声に応じて、「アー」と言ったり、「アー」と真似てみるなど、人も意識させる応じ方もあります。子どものそばに寄り添って見守っているだけではないと思います。幼児期の子どもたちにとって、大人は「友だち」であると同時に「援助者」という側面ももっています。子どもたちの心を育て、ことばを広げ、コミュニケーションの力を育んでいくために、私たちがやらなければならぬことは、とても多いのですね。話し手と聞き手という関係は、やりとりの中で常に交代しているわけですから……。



。八月は、キッズの月です。八月二十五日午後一時  
出欠についての連絡は  
〇九〇ー九三三ハル七三九五(中野センター携帯)